



◎相談員の自己紹介
(2・3面)

◎土井さん、
ご苦労様でした
(4・5面)

子どもと保護者と教職員のための子育て・教育電話相談

「本当に、草原を転がっていいの?」と

道子どもセンターが「東日本大震災・原発事故、子どもと教育の未来を考える」講演会開催

6月22日(土)、北海道子どもセンターは、札幌市教育文化会館で、「東日本大震災・原発事故、子どもと教育の未来を考える」と題して、宍戸仙助さん(3月末まで、福島県町立小学校長)を迎えての講演会を開催しました。北海道教育委員会・札幌市教育委員会、北海道新聞などマスコミ各社からも多くの後援をいただきました。

宍戸さんは、移動教室先で草原を転げるゲームをやらうとしたら、子どもたちから「先生、本当にここで転がっていいの。大丈夫なの?」と声が上がったことを紹介し、子どもに安心と笑顔を取り戻すためがんばっている福島の取り組みをさらに支えてほしいと訴えていました。

「千年に一度の大震災・原発災害は、教育のありように、特に学校や教職員に自ら問うべき課題を提起していると思う」とのべ、教育現場・教職員が子どもたちの笑顔を求めて教育活動を創造していくことの大切さを強調していました。

講師の宍戸さんは、翌日午前、札幌市内の小中学校で、4年・5年・6年の「命の授業」を行いました。午後には、江別にある札幌学院大学で「未来に生きるとは」という話の授業をしました。宍戸さんの事実を丁寧にたどりながら情熱あふれる語り口は、小学生200人、大学生150人に伝わったと思います。



6月22日の講演の録画DVDがあります。希望される方は、ご連絡下さい。資料とともに実費提供します。

メールでご連絡ください。

(do-kodomo@hotmail.co.jp)

相談員紹介

北海道子どもセンターの相談員は現在6人です。人柄なども「自己紹介」でお伝えします。今回は4人の紹介です。残りの2人は、次号で紹介しします。

相談員は、月～金曜日の午前10時から午後2時まで、受話器のまえに張り付いています。

悩んでいる子どもや父母、先生たちに寄り添い、励ましていきたい

北海道子どもセンター相談員

(元小学校教諭)

池内 省子



し、勉強は分かるまで教えてくれました。

高校も「やる時はやる、やる事はやる、やれるだけやる」という自由な校風だったので、楽しく過ごしました。

学校に就職してから管理と競争の厳しい教育に接し、自分が受けてきた教育の違いを痛感しました。その当時は組合も強かったし、教職員の会や道民教、サークル等で学習しながら何とか定年まで勤務することができました。

退職して親の介護をしていたら、子どもセンターの相談員をしてほしいという話があり迷いましたが、D先生の「気分転換できるよ」S先生の「聞いてやるだけでいいんだよ」の言葉で引き受けることにしました。

悩んでいる子どもや父母、先生たちに寄り添い、励ましていきたいと思っています。

私は小学校時代と中学校時代のほとんどを礼文島で過ごしました。その当時、礼文島には高校がなかったので、父親がどこか高校のある所へ転勤させてほしいと何年も前からお願いしていたのが、中学3年生の3学期になってやっと実現したのです。

小さな島から急に札幌に出てきた時は見るものが珍しかったし、周りの人は田舎者の私の言うことや態度に驚いたらしく、お互いにびっくりし合っって中学3年生の何日かを過ごしました。

礼文島の小、中学校の教育はとてものんびりしていましたが、子どもの興味や関心、疑問を大事に

広い北海道、地方の仲間の力を借りての相談活動も

北海道子どもセンター相談員

(元小学校教諭)

谷 光



海外で日本語教師にとも思ったのですが、それはなかなか実現せず、今は、札幌にある外国人・帰国者の子どもたちへの日本語学習支援をしているボランティア団体に参加しています。サハリンから帰国した中学生、ボリビアから日本に来た小学生の日本語学習の支援をしています。

子どもセンターの相談員としては一番古くなってしまいました。もう少しお手伝いさせてもらおうかと思っています。他に、現職のときに参加していた全国生活指導研究会での関わりから札幌「非行」と向き合う親たちの会・雪どけの会の世話人、子どもの権利のための国連NGO・DCI札幌セクションの事務局長などをしています。

こうした活動が相談にも役立っています。広い北海道です、地方からの相談もあります。そんなとき、それぞれの地域でがんばっている仲間と連絡して力を借りています。これまでのつながりが私たちの相談活動を支えてくれていることを日々実感しています。

早いもので、退職して10年が過ぎてしまいました。退職後、待ちかまえていた方たちからいろいろ声を掛けられたのですが、思うところがあってみんなお断りさせてもらい、再任用も希望せずに、札幌市内のある専門学校「日本語教師養成課程」に入学しました。半年間、毎日弁当を持って通い、若者に混じって一日4コマの講義を受けました。テストやレポート、実習と結構ハードでしたが、自分でも意外だったのは、学ぶことの喜びを実感できたことです。日本語のおもしろさ、奥深さを感じさせてくれた半年でした。また、実習では、チームで授業案をつくり、実際に外国人に日本語を教えるのですが、娘や息子のような年齢の若者と議論を交わし、教材づくりなどを通して交流できたことも楽しい体験でした。